

# パンドラの箱庭

静電気除去スプレー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔法による戦争、争いが消されたパラレルワールド

争いは災厄として箱に封じ込められている。

そんな平和の中で生きるのは気弱で“空気”なレイブンクロー生。

希望と讃えられる少年が入学してきた事で箱庭にも変化が…？

危機、困難が箱に閉じ込められた魔法界でのお話になります。

ご都合主義です。

# 目次

談話室	1
教えを説く者たち	4
変化	11
二つのカップ	26



## 談話室

災厄が降りかかる。そう予言をした先人はその災厄を箱に閉じ込めた。そしてその箱さえ開けなければ災厄は降りかからない。

平和を謳歌する為には好奇心を殺せば良い。箱は開けずに捨て置けば良い。気にせず歩いてゆけば良い。それが平和を繋げる為の守らなければいけないルール。

過去は忘れ去られる。

あの人の復活、魔法戦争、流れた血……未来を預言した者により災厄は箱に閉じ込められた。

その箱さえ開けなければ、平和のまま暮らしていける。

平和の時に生まれ落ちた者は知らない。箱を開ければどんな災厄が降りかかるのかを。知りえない過去は現在を生きる者にとっては現実味がない。だからそぎ落とさねばならないのだ、好奇心とその無垢な心を。

「みんな『希望の少年』にお熱じゃない。何だか面白くないわね」

死の呪いを受けても生き残った少年、ハリー・ポッターがホグワーツに入学した事は瞬く間に広まった。

「レイブンクロー」と書かれた談話室には大きな丸眼鏡に話す度に覗く歯の矯正器、頬にそばかすを散らした少女がつまらなさそうに言う。

ニイナⅡヘルツエナ。レイブンクローの三年生である。

「希望だなんて凄いいじゃない」

ニイナのご機嫌を窺いながら曖昧に笑うのはユニシアⅡドレナード。

彼女もニイナと同じくレイブンクローの三年生だ。

「凄いもんですか。グリフィンボールで良かった、って馬鹿みたいに言っているみたいよ。グリフィンボールの何がそんなに良いのかしら、馬鹿ばかりじゃない」

ため息をついて備え付けのソファアに背を預ける。ニイナは杖を小さく動いて自分の口元にスナック菓子を使った。

「ニイナは優秀なものね」

グリフィンボールの悪口には障らず、ユニシアはただそう言ってふわふわと空に漂うスナック菓子を見つめていた。

ニイナは我が強く、プライドも高い。それに対してユニシアは絵に描いた様な気弱で

まるで空気とからかわれる事もあった。しかしながら同じ寮で同じ部屋、そして最大の共通点はお互いに友達と呼ばれるそれがいなかっただのである。こうして二人はほとんどの時間を共に過ごしてきた。きつかけはそうだととしても、お互い短くない時間を過ごしてきているのは事実だった。

「入学式であれだけ英雄扱いよ？ さぞかしい気分よねえ」

スナック菓子がニイナの口内に消えていく。

ユニシアはソフアー近くにゐるテーブルに手を伸ばして炭酸の抜けたまるで砂糖水の様なジュースを一口飲んだ。

「…そうかもね。でも、楽しそうで良いじゃない」

「鼻っばしの強そうなものばかりで嫌になるわ。新入生なら新入生らしく大人しくしていればいいのよ」

「ニイナ、私たちはレイブンクローよ。グリフィンドール生とはあまり関わらないわよ、きつと」

「何寮でも関係ないわ、うるさい奴はみんな嫌い」

ふん、と鼻を鳴らしてニイナが立ち上がるとユニシアも後を追う様にして談話室を後にした。

## 教えを説く者たち

「ふん、早速英雄扱いでさぞ気分は良いだろうね。ポッター？」

整えられたプラチナブロンドの髪が目立つ。授業終わりにユニシアが廊下を一人で歩いていればそんな声が耳に入ってきた。ポッター、それは希望の少年だと足を止めて様子を見ればそこにはスリザリンのマルフォイもいた。取り巻きらしきスリザリン生もいる。

「何が言いたいんだい？」

「その傷は希望の証なんかじゃない。箱に見捨てられただけだろう？」

マルフォイが言うと手を叩いて他のスリザリン生が笑う。箱とは災厄を閉じ込めたと言われている箱の事だろう。ユニシアたちは現実味がないおとぎ話の様に思っているが、その箱には過去からした未来、つまり今現在の災厄が閉じ込められているのだ。

ポッターの額にある傷は予言出来なかったという事にもなる。ユニシアはぼんやりとそんな事を考えていると突然前方から本が飛んできた。

持っていた教科書で何とかあたる事は避けられたが、飛んできた方にはマルフォイとポッターがいる。周りにも気に留めず二人で魔法の応酬をしているのだからユニシア

も小さくため息をついてしまった。

「…早く部屋に戻ろう」

「戻る前に、少しは後輩指導をしたら如何かね？」

独り言もいつの間にか拾われており、ユニシアの背後には陰険、と言われるスリザリの寮監がいた。

「ぐ、ぐめんなさい…！」

「何がだ。お前はすぐに謝るな、…まあ騒がしいのよりかは幾分マシだが」

顔を強張らせながらユニシアは俯いた。いくら授業を受けてもなかなか慣れないのがこの教師だ。あからさまな嫌味に態度、会えば謝ってしまうのがユニシアだった。

「貴様も三年なのだから、少しはマトモになつたらどうだ？独り立ちも出来ていないだろう？…え？」

「…ぐめ…、…その、」

謝りかけて止めるも、言葉が出てこない。ユニシアは困り顔で視線を床に落とした。「何か言いたい事があるなら言えば良い。少しなら待つていてやるが？」

俯く顔に壮年の、意地の悪い表情が近付く。そんな時、足音を立てながら廊下に声が響いた。

「ちよっと！何してるのよ……つて、あんたら邪魔よ！」

マルフォイ達の間を割って入ったと思えば眉を吊り上げてユニシアのいるところまでやってきたのはニイナだった。

「他寮の先生が、優秀なレイブクロー生に何かご用かしら？」

「出てきたな、片割れが」

「何ですって？」

「も、もう大丈夫だから……先生にそんな言い方しちゃだめよ」

救世主だと喜んだのもつかの間、どうにもその救世主が荒っぽい様子でユニシアが止めに入った。ニイナはふんと鼻を鳴らしてユニシアの額にばちんと音がするほどのデコピンをした。ユニシアは先ほどの困り顔とは比べ物にならないほどに表情を歪めて額を抑えた。

「い、痛い……！ニイナのがよっほど痛いじゃない?!」

「良い？あんたもちゃんと言いつ返すのよ！」

そんなやり取りを見て、スネイプは一度ユニシアを見てから「お先に」と言つてその場を後にしていった。

「あんななんかより、お気に入りのグリフィンドル生をいじめれば良いのに」

スネイプがいなくなると、未だにやりあっているポッター達を遠目に見てニイナは言つた。

「相変わらず、あんたへのいびりは健在みたいね」

「少しは和らいでくれると嬉しかったんだけどね」

「仕方ないわよ、あんたって付け入りやすいから」

からかう様に笑うニイナにユニシアは眉を下げるだけだった。

「そんな事よりも、新しく入った防衛術の教師を見た？」

「クイレル教授の事？」

「わざとらしい程びくびくしてて頼り甲斐も無いし、よくあんなのが一年生を担当出来るわよね」

「あの人だって、先生一年生でしょう？仕方ないと思うけどな」

「同族嫌悪ならぬ同族愛好ってところかしら？」

「え？ど、どういう意味？」

「そう言うところよ」

楽しそうに笑いながら2人は自分達の部屋に戻ろうと歩を進めていった。そう、今年から入ったのは新入生だけではない。防衛術の教師、クイレルだ。

頭にターバンを巻いておどおどしている様子が目立つ。ニイナがそう言うのも無理はなかった。

「ほら、噂をすれば……」

ニイナがそう言い、そつと指をさした先にはクイレルの姿があった。床に教材を落と  
してしまつたらしく、慌てながら一人で拾い上げている。

「鈍くさいわね…」

他人事と言つた風にニイナが呟くのと同時にユニシアが速足でクイレルの傍へ駆け  
寄つていくのはほぼ同時であつた。

「先生、拾うの手伝いますね」

「え？あ、あの…ありがとうございます…確か君は…」

「レイブンクローのドレナードです」

「レイブンクロー…え、ええと…私もレイブンクローだったんです…お、同じですね」

「本当ですか？それじゃあ先輩だ」

クイレルの言葉に嬉しそうにそう返すとクイレルは少し驚いた様にしてから照れく  
さそうにぎこちない笑みを浮かべた。それを見てニイナはため息をつき、やっていられ  
ないと言つた様子で視線を逸らす。

「先生、これで全部ですか？」

拾い上げたものを全てクイレルに渡し終えるとクイレルはじつとユニシアを見つめ  
たまま小さく頷いた。

「…ドレナード、…れ、レイブンクローの…ドレナード」

「は、はい。何でしょう?」

「……あ、ありがとう。君は、…優しい」

クイレルの言葉にユニシアは再び嬉しそうに笑みを浮かべた。

普段は同僚の生徒にすら地味だ空気だと言われている反動か、優しいと言われた事は素直に心に響く言葉だった。

「どういたしましたして、先生。…学校のみんなが、先生みたいに穏やかな人ばかりだったら良いのに」

「…そ、そんな…。どうしてだい?」

「みんな、個性が強い人が多いでしょう?…だから、先生みたいな穏やかな人は貴重です」

ニイナがおどおどしている、と形容したクイレルをユニシアは穏やかと言葉にした。

それに対してクイレルはうつとりとしたように息を漏らした。

「私も、君の様な生徒に出会えて光栄だよ。学生時代に会えていたらどんなに良かったか」

「え?」

ユニシアはクイレルの様子にどこか違和感を感じて思わず疑問符を浮かべたが、何が違和感になっているのかユニシア自身は気付いていない様子であった。

「さ、さあ、もうすぐ昼食の時間でしょう？行って下さい」

後ろ髪を引かれるような気持ちのまま、ユニシアはニイナのところまで戻っていった。

「何？クイレルは穏やかで何だった？」

「……ニイナ」

「…何よ」

「……何でもない」

ぼんやりと何かを考えるようにする姿のユニシアにニイナは首を傾げた。

近くにいなかったニイナは二人が何を話していたかなどほとんど聞こえていない。

聞こえてきたのはユニシアの声のみだった。

「何よそれ、気になるじゃない」

「自分でもよく分からないんだもの」

ユニシアは振り返ってその姿を見ようとしたが、そこにはもうクイレルの姿はなかった。

## 変化

ホグワーツの図書室にはたくさんの本が並べられている。

授業で使う本を探しにユニシアも本棚の前で目当ての背表紙を探していた。

「あの、すみません……一番上の棚にある本、取つていただけませんか？」

下から聞こえてきた声に視線を落とすと、そこには見目の整った可愛らしい少女が本を指さしてユニシアを見上げていた。

「え、あ……ああ、もちろん。どの本？」

「えっと、右の……それ！開けてはいけない箱、……それです！」

ユニシアよりは年下であろう少女の言葉通りに本を取つてやると、少女は嬉しそうにお辞儀をした。

「ありがとうございます」

「どういたしまして、……その本に興味があるの？」

「……いいませんか？」

「いい、いやそんな事……」

不満そうに言いながらその場で本を開き始める。ユニシアも自然と視線が本にいつ

た。

「…ハリーが…ええと、友達が言っていたんです。『助けて、開けてくれ』って毎晩聞こえてくるって」

「『開けてくれ』?」

「ええ、気味が悪いでしょう?だから…」

「調べてあげているのね。優しい」

「そつ、そんな事ありません…!」

本から顔を上げてほんのりと頬を赤らめて言うのは新入生のハーマイオニーだった。ユニシアはその様子に小さく笑って頷いた。

「あ、ええと…私はハーマイオニー・グレンジャーです。グリフィンドールの…」

「そう。私はユニシア・ドレナード。レイブンクローの三年生」

「…三年生…、やっぱり先輩だったんですね」

「そうなるね。…ところでその本、実は読んだことがあるのよね」

「そうなんですか?」

二人は隣同士で椅子に腰かけ、先ほどの本をぱらぱらと捲りながら話し始めた。

「私たちより先に生まれた魔法使い、魔女たちがこれから起こる災厄を予言してそれをたくさん箱に閉じ込めた。だから今平和に生きている、そんな話だったわ」

「まるでおとぎ話ね。…どうやって予言したの？箱ってどんな箱？災厄って…」

「詳しくは書かれていない。でも、災厄を箱に閉じ込めた者は死んだ、って確か書いてあるはず」

「……そう、なんですか」

「箱がたくさんあるなら、その分人が死んでいるのかしらね。…そして開けたらもつとたくさんの方が危険な目にあう…なんて、教訓めいたおとぎ話よね」

「…好奇心で開けるな、ですか？」

ハーマイオニーの不安そうな目にユニシアは一度言葉に詰まってしまった。

先ほど言いかけたのはハリー・ポッターの事だろう。同じ寮で、彼女は彼を友達と言っていた。入学したばかりで自分もまだ不安定だと言うのに友人がそんな状態では更に不安は加速してしまうだろう。

ユニシアは開いていた本を閉じさせ、ゆっくりと椅子から立ちあがった。

「おとぎ話よ。…でも、その友達にはよく言っておいた方が良くも出来ない。…きつと箱は、開けないに越した事はないから」

本をそつと本棚に戻し、ユニシアはぼんやりとその背表紙を見つめた。

おとぎ話なんかではないかもしれない。本当にそんな箱が存在していたとして、彼の聞く声の主は誰なのか、そこまで考えてしまうも口には出さなかった。

「ドレナード先輩」

「え？」

「私、きつとハリーを助けてみせます」

そう言つてハーマイオニーは何かを決めたような強い目で頷き、図書室を慌ただしく出て行つてしまった。

残されたユニシアは、驚いた様にハーマイオニーが出て行つた扉を見つめていたが、やがて困つた様に微かに笑つた。

「友達思いで勇敢で…、完璧すぎる…」

自嘲気味にユニシアがそう呟くと、何だか自分にはないものを彼女は全て持っている様な、自分の不甲斐なさ、不完全さが露にされた気がしていた。

ユニシアは入学当初から引つ込み思案で目立つことが苦手だった。そんな中、教室の隅で授業を受けていると何も話さない人形みたい、まるで空気だからかわれていた。そんな中、ニイナはユニシアにとつて初めての友人であつた。そんな自分に偏見も侮蔑も、むしろ言い返せと叱咤してくれる存在として。

そんなニイナが、もしそんな気味の悪い声を聞いていたらと考えるとユニシアは顔が強張つていくのが分かつた。

「……今までこんな事、考えた事もなかつたのに」

嫌な考えを断ち切るように頭を振り、本棚にもう一度向き直った。元々は授業で使う本を探していた事を思い出し目当ての本を本棚から数冊抜き取って足早にカウンターへ向かった。

本を持ちながら自分の部屋へ向かうと、先ほど会ったハーマイオニーが廊下で誰かと話しているのが見える。ユニシアはハリー・ポッターと話でもしているのかと思いい、そつと近づいていった。

「あなたがぶつかって来たんでしよう？謝りなさいよ！」

「お前がぶつかって来たんだらう?!グリフィンドールのくせに生意気だぞ！」

思わず「あ」と声を上げてしまうユニシアを余所に二人、ハーマイオニーとスリザリンのマルフォイが口論をしていた。

「どういう意味よ?!失礼ね！」

寮同士、特にグリフィンドールとスリザリンは仲が悪いと聞く。まさにその言葉を具現化したような状況に苦笑を漏らしつつ、普段ならこのまま見なかつた事にしているところのユニシアだがどうにもそんな気にはならなかつたのか窺う様に二人に近付いていった。

「ええと、こんなところでどうしたの?」

「ドレナード先輩!ひどいんです、彼が……!」

「誰だ、その女」

明らかに年下である少年に「その女」と呼ばれユニシアはどう返したものと眉を微かに寄せた。

「先輩に向かって失礼よ！」

「先輩？でもその女はスリザリン生じゃない。興味もないね」

「……新入生ってこわい」

ユニシアはそつと本音を漏らしつつ、このままではいけないときゆつと本を握る手に力を込めて口を開いた。

「その女、じゃなくてドレナードよ。ユニシア・ドレナード。ちなみに学年は三年生。」

「……だから何です？僕はマルフォイ家のドラコだ。知らないわけないだろう？」

「分かった、自己紹介をどうもありがとう。それよりも、こんなところでけんかをしてはいけないの。あなた、前にもけんかをしていたわよね？」

マルフォイの方を見てユニシアが言うと、彼は何の気なしに鼻で笑っていた。

「あなたこそ、スネイプ先生に良いように言われていましたよね？」

「み、見られてた……」

先輩らしく注意をしようと思ったが、出鼻を挫かれた様な気持ちでユニシアは視線を床に落としてしまった。そんな様子をほらはらしながらハーマイオニーは見つめてい

る。

「それで？レイブンクローの偉大な先輩は僕に何をご教授して頂けるのですか？」

「え？そ、それは…。女の子には優しくしなきゃだめよ。仲良くしなきゃ、そう。そんな事が言いたかったの」

「グリフィンドールとは仲良く出来ません」

「どうして？」

馬鹿にした様にマルフォイは返すも、ユニシアは至って真面目な顔つきで聞き返した。

「…本気で言っているんですか？グリフィンドール、この女はマグルだ。純血じゃない」

「純血じゃないから仲良く出来ないの？変なこだわりが有るのね」

「変?!…相手に出来ないな、レイブンクローも高がしれてる」

ユニシアは怒りはしないが微かに眉を寄せてマルフォイを見つめた。やがてマルフォイに向かって手を伸ばすと、マルフォイの頬を優しくつまんだ。

「こら、そんな事を言っってはいけないのよ」

まるで幼子に対するそれだ。身を屈め、たしなめる様に言う。ユニシア自身は気付いていないのかもしれないがプライドの高い彼にとってはなかなか衝撃的だったらしく、顔を真っ赤にさせて慌ててユニシアから離れた。

「子ども扱いするな！」

「私も子どもよ？」

「そうじゃない！」

どこか噛み合わない二人の会話に終わりを告げさせたのは低い男の声だった。

「…我が寮の新入生に何か用かね？」

ユニシアははつとして口を抑えるも当の本人であるスネイプは口角を上げて嫌な笑みをうつすらと浮かべている。

「先生、彼が謝らないんです！」

「待ってグレンジャー、やめよう！」

先生が来た、とすぐさまハーマイオニーはそう言うもユニシアは困った様にハーマイオニーを止めさせる。

「どうしてですか？ちゃんとと言わなきゃだめよ！」

「そうじゃなくて…」

「グレンジャー、うちのマルフォイが何かしたのかね？」

「え？だから私たちに…」

「さぞひどい事をしたのだろうな？しかし証拠がなければ貴様らはただの？吐きになるわけだが、ではお教え願おうか優秀なグリフィンドールのグレンジャー。マルフォイは

「一体君に何をしたと言っただね？」

スネイプの言葉にグレンジャーの口がゆっくりと閉じていく。悔しそうにしながらきつと睨めばスネイプは興味なさげに一瞥して隣でどうしようかと落ち着かない様子のユニシアを見つめた。

「それでお前は何だ、グレンジャーのお守りならもう少し役目を全うしてくれないと困るのだがね」

スネイプは自分の味方だとすっかり安心しきっているのかマルフォイはにやにやと二人を見ていた。

「……お、お守りなんかじゃ、ありません」

「では何だ、我輩が言った後輩指導でもしていたのか？まるで様になっていないぞ」

「……わ、分かっています」

「…ではいつも通り大人しく、口を挟まないでいけば良い」

そう言うスネイプはユニシアに意地の悪い笑みを浮かべ、そのままローブを翻して歩き出してしまった。すぐにマルフォイもスネイプの後を追い、その場に残されたのはハーマイオニーとユニシアの二人だった。

「ごめんなさい、私もう少ししやんとしていれば…」

「そんな事ありません、来てくれてありがとう」

グレンジャーの照れくさそうな笑みにユニシアは曖昧に頷き、自分のやるせなさに小さくため息をついた。

「でもひどいわ、あの先生。ハナから私たちを信用してくれないのね。スリザリン鼻根にも程があるわ」

「まあ、そうね…意地悪よね」

「やっぱりあの先生が、ハリーを狙って災厄の箱を開けさせようとしているのかしら」  
「え？どうしたの急に」

意地の悪い先生、から随分とひどい存在になっていたスネイプにユニシアは思わず怪訝そうにした。

「先輩も、そう思いませんか？…私たち、見ちやっただです。あの人がハリーに呪文をかけていたのを。クイディッチの試合の時にハリー、ずっと声に邪魔されていたって聞いて、『開けないとこのまま死ぬ』…脅されていたんです！」

「クイディッチ？あなた、よくあんな筈の暴力みたいなものを見たいと思ったわね」

「筈の暴力？まあ、確かに少し野蛮だとは思いますが…。今はそんな事どうでも良いの！」

「ハーマイオニーが言うにはスネイプがハリーを狙って妨害の呪文を唱えていたと言うのだ。そんな事は教師のやる事ではない。何か目的があつてそうしたとすればその

目的はきつと恐ろしいものだろう。ユニシアはハーマイオニーの話を最後まで聞いてからゆっくりと首を横に振った。

「きつと見間違いいよ」

「どうしてそんな事が言えるんです？あなたは見ていないのに！」

「確かに見ていないわ。でも、生徒にけがをさせたりしないわよ」

「あんなにひどい事を言われても、あの人を信じるんですか？」

「信じる、つてそんな大げさな…。私はただ…」

「あなたも私の事、信じてくれないのね。…優しい先輩だと思ったのに」

そう言うとうとハーマイオニーはそのまま廊下を走って行ってしまった。

最後に残されたユニシアはしばらくぼんやりと廊下の先を見つめていたがやがて肩を落としてゆっくりと部屋に向かって歩き出した。

「…私が悪いのよね、分かってる。…口も上手くないし、大して優しくもない…」

ふと足を止めて外を見ると、ハーマイオニーがハリー、そして同じ寮のロンと三人で何か話しているのが見えた。

特に聞き耳を立てる事はしなかったが、ユニシアはその姿を見て自分よりもよっぽど考え、行動していると感じた。

「あ、ユニシア。そんなところでぼうっとしてどうしたの？」

通りかかったニイナに声をかけられ、顔をゆつくりと向けるとニイナは今までユニシアが見ていた外に目をやった。

「なに？またあの新入生たち？良くない事でもしようとしているんじゃないの？」

「あの子たち、しっかり自分で考えているのね」

「……ユニシア、でもその答えが間違っていたら無意味よ。正解にたどり着いた方が優秀なの。いくら考えても間違いなら、それは馬鹿のしている事よ」

「そんな言い方……」

「でも事実でしょう？色眼鏡で見ている事もありそうだし、まあ何しろ一年生よ？  
「イッチ」年生かしら。…はは、笑えない？」

ニイナは大して面白くもなさそうにそう言えば、何も返して来ないユニシアにため息をついた。

「あのねえ、何に感化されたか知らないけど妙な事考えなくて良いのよ。あの子たちと私たちは違う、私たちは賢いでしょう？」

「…あなたはね、あなたは賢いわよ。レイブクローの中でもいつも試験は上位だし」

「それはそうよ。だって私は優秀なもの。でもあなただってそこそこじゃない」

「……いつも居残りよ」

「…まあ、でも…居残りなんてあれだけじゃない。苦手なのが一つくらいあっても死な

ないわ」

ユニシアの肩をとんと叩き、ニイナは再びハリー達のいる外へ視線を移した。

厄介者、と小さくニイナが呟くとユニシアはそれが聞こえたのか窺う様に彼女の顔を見やりハリー達を見る瞳に気圧されていた。

「…ニイナ？」

「何でもないので。…ただ私は平和に暮らしたいだけ、今まで通りにね。それはあんただって一緒でしょ？」

「それは、そうだけど…」

歯切れの悪いユニシアにもう一度ため息をついてニイナはその場を後にした。

ユニシアもこのままここに留まるわけにはいかないとゆつくりと歩みを進めた、その時に誰かがユニシアの名を呼んだ。

「ド、ドレナード…。こんなところで、ど…どうしたんです？」

「クイレル先生…」

「わ、私は…その、授業が終わって…片付けも、終わったところなんです」

ぎこちなく笑みを浮かべ、ユニシアを見つめるのはクイレルだった。

しかしユニシアの晴れない表情にクイレルは心配そうに眉を寄せる。

「……………どうしました？」

「いえ、何でもありません」

「教えて下さい。…貴女に元気がないと…わ、私は…し、し、心配…で…」

持っていた教材を廊下にゆっくりと下ろすと、クイレルはユニシアの両肩に手を置いて徐々に距離を詰めていく。ユニシアは視線を落ち着かない様子で逸らしながら弱く大丈夫、とだけ返した。

「あの、えつと…」

「…ここでは話せないかい？…な、なら…私の部屋で話そう。この間のお礼もしたいんだ」

「この間？」

「…助けて、くれただろうか？落としたものを拾ってくれた」

「そんな、あれは…」

「……来て、くれるだろうか？」

だんだんと俯きがちになる顔に、クイレルは何の躊躇いもなく顎を掴んでユニシアを自分に向けさせた。

思わずびくりと肩を揺らし、拒否権などないのだとじわりと広がる恐怖感にユニシアは何も答えず首を一度だけ縦に動かした。気弱な教師、と言う自分にも似た部分を持っていると思っていた彼女は、この行動に酷く動揺をしていた。

「よ、良かった…。ではおいで、ドレナード」

離れていく後姿を慌てて追いかければ、目の前にいた生徒とぶつかってしまった。

ごめんなさい、とユニシアが謝れば鼻で笑われたのがユニシアにも分かった。

「何だ、空気か。どうりで痛くないと思ったぜ」

「…あの、」

ユニシアが言葉を続ける前にわざと肩をぶつけ、生徒はいなくなってしまう。彼女にとつてこういって事は初めてではなかったが、立ち止まって彼女を見ていたクイレルは表情を変えないままゆつくりと瞬きをした。瞳は冷たい。

「…ドレナード、時間がない。早く来なさい」

ユニシアはクイレルの方を見つめ、小さく頷いた。

## 二つのカップ

クイレルの部屋は何とも簡素なものだった。必要最低限の家具の中に古ぼけた本や汚れた空の瓶が所々に見える。

クイレルはユニシアを部屋に招くと別の部屋から椅子を持ってきてユニシアに座るように勧めた。普段は一脚しか用意されていないのだろう。テーブルに向かい合わせに置かれた二脚の椅子は別の種類のものであった。

「…その、失礼します」

周りをきよろきよろと落ち着かない様子で椅子に座ったユニシアはクイレルが淹れてくれた湯気の立つ温かな珈琲に視線を移した。

その様子に小さく口元を緩め、クイレルも向かいに座る。

「珈琲は苦手じゃないかい？砂糖も、ミルクもあるからね」

先ほどの様子に少なからず恐怖を感じてはいたが、湯気の立つそれと彼の言葉にユニシアは控えめに笑みを浮かべた。

「…ドレナード、君は…ああいう事は良くあるのかい？」

「ああいう事？」

「肩をぶつけられて…、酷い言葉を受けていた。…よく、あるのかい」

クイレルはカップの中で微かに揺れる液体をぼんやりと見つめながらユニシアに問いかける。黒い液体にはクイレル自身の顔が映されていた。

「……私って、鈍くさいから…仕方ないんです」

無理に口角を上げ、猫背のまま珈琲に口をつけるとクイレルは無意識にテーブルの端を軽く指で叩いた。

「どうして? どうして仕方ないと思う? 悪いのは君じゃない」

「……え、つと……」

「悪いのは、君の周りの奴らだろう? 君を軽んじて、見下している。…悔しくないのかい? 悲しくはないのかい?」

椅子から腰を上げ、ユニシアの顔にぐつと詰めよる。

クイレルは早く頷けと言わんばかりに彼女の瞳を見つめては喉が渇くのか何度も唾を飲み込んでいた。

「…先生も、そういう事があつたんですか?」

鬼気迫る瞳に圧されながらもユニシアは小さな声で返した。

彼女からそう返されると思っていなかったのかクイレルは「え?」と動揺した様に声を上擦らせる。

「上手く、いかないものですよ。友達をあつという間に作れる人や、運動が得意な人。勉強は…少しだけ得意だけど一番にはなれないし…みんな凄いなって思います」

その声に妬みは感じられない。むしろ羨望、手に届かないものを話しているような穏やかなものだった。

「……悔しいし、悲しいけど…こんな私にも友人がいるんです。気が強くて、ちよつと口が悪いけど…とっても素敵な友人です。嬉しい事や悲しい事を話せる友達。…先生は？友達でなくても、そういう人はいますか？」

大人しい顔をして、思いをそのままぶつけてくる瞳にクイレルは更に動揺した。

恐ろしい問いかけだ。そんな対等な立場でいてくれる人がお前にはいるのか、その問いかけにクイレルは答えられなかった。押し黙り、じわりと手汗が滲むのを感じていた。

「……そんな人に巡り合うのって、難しいですよ。だから…」

「そんな事、箱を開ければ関係ない！」

テーブルが揺れ、カップから珈琲が零れた。

クイレルは顔を赤くさせ、大きな音を立てて椅子から立ちあがったと思うと、ユニシアの方へとまわり椅子に座る彼女を見下ろした。

「先生、どうして…怒っているんですか？ごめんなさい、えつと…」

ユニシアは目を見開いたまま見上げている。

そんな怯えた様な呆けた表情に苛立ちを感じ、クイレルはユニシアの腕を掴んだ。

「……そうしたら、世界が変わるんだ。…私も君も、救われる…一緒に……」

「…箱……?」

一緒に救われる、という言葉が頭に残りながらもユニシアは先ほど聞いた言葉を聞き返した。箱とはハーマイオニーと話していた箱の事ではないだろうか、しかし箱を開けさせようとしているのは確かクイレルではなかったはずだ。

「二人で、…救われたいとは思わないか?」

ここでやつと、ユニシアは以前に感じていた違和感の正体に気が付いた。クイレルはこの部屋に入ってから一度も言葉をどもったり自信なさげにはしていない。どちらが本当の彼の姿なのだろうと無意識に眉を寄せる。

「…確かに、さつきみたいな事をされて良い気分なわけではない。でも…」

「でも、何だ? 私にはお前と違って友人がいる、か? そんな事をさも偉そうに語るな! その友人とやらがいて何になる?! 自分の欲しいものをくれるのか?! 違うだろう! それに心の奥では、お前を馬鹿にしているに違いない!」

握られた腕にクイレルの爪が食い込む。ユニシアは痛みを我慢しながら小さく首を横に振った。

「それでも良い、…それでも一緒にいてくれるなんて凄く嬉しい事だと思いませんか」  
「……呆れた、…底なしの……馬鹿じゃないか」

ふつと腕にかけられた力が抜け、クイレルはふらふらと壁にもたれかかった。ユニシアは心配そうに見つめながら自分も椅子から腰を上げた。

「先生の欲しいものって、何でしょう」

「……質問責めだな。君は？まさか無欲じゃないだろう」

「私は…、…年末に一緒にいてくれる人が欲しいです」

「何だそれは」

「ニイナは家に帰っちゃうから、ホグワーツで一緒にいてくれる人がいたらもう何にも言いません」

「……謙虚だな」

「ホグワーツに残る人、あんまり多くないんです。それに私、友達あんまりいないから」

「……私も、帰る予定はない」

「…本当ですか？なら一緒に…いられたら素敵ですね」

ユニシアに怯えた様子はない。クイレルを穏やかに見つめていた。そんな様子に彼はどこか他人ごとの様に頷いた。

「…いつもの先生は、…本物じゃないんですね…？」

「何の事…、ああ…なるほど。そうだよ、まあ…半分はね」

「さつき言っていた箱って何の事ですか？」

「…今そんな事を聞き返して、自分の身が危ないとは思わないのか？…聞いた事はあるだろうに」

薄く笑みを浮かべ、自分を見つめるユニシアを見つめ返す。

先ほどの激昂はすっかり消え失せた様だった。

「災厄が閉じ込められた箱、ですか？あれって本当に…」

「あれは、おとぎ話なんかじゃない。閉じ込めた箱を開ければ本当に災厄が降りかかる。闇の魔法使いたちは皆それを、そして開けられる者を探している。自分達の時代にするために」

「……先生は、悪い魔法使いなんですか？」

「……いいや、弱い魔法使いなんだ。君の言葉を聞いて改めて実感したよ。でも、これからは違う。そうだろう？」

クイレルはユニシアにゆつくりと近付き、するりと頭を撫でた。

「そう、これからは…」

クイレルが言葉を続ける前に扉がノックされ、思わず口を噤む。クイレルはユニシアに奥へ行っている様にだけ告げると扉の方へ消えて行ってしまう。ユニシアは仕方な

くその言葉通りにしようとするも、「待て！」と慌てた様なクイレルの声に肩を揺らして反射的に古びたクローゼットの中へ隠れた。扉の隙間から男が入ってきたのが分かった。

「何を慌てている？我輩に見せたくないものでもあるのかね」

「ち、違います…けれど、その…」

「カップが二つ……誰を隠している？」

「誰も……隠して、など……」

クイレルが壁際まで追い詰められている。迫っているのは他でもないスネイプだった。ユニシアはその様子を見ながら心臓が跳ねあがるのが分かった。

「誰を駒に利用するつもりだ。……余計な事はしないで頂きたい」

スネイプはクイレルの首元に杖をぐつと押し当てている。これではまるで脅しではないかとユニシアの表情が強張る。

「やはり貴様は使えんな。……これが最後だ、どちらにつくかはつきりしろ。返答次第では勿論…貴様の息が止まる事になるのだがな」

嫌に口角を上げてスネイプはそう言った。ユニシアがそれを見て誰が悪人なのかと決めるには十分過ぎる言葉になった。彼は、クイレルは脅されている。スネイプに脅されているのだ。二人は繋がっている。

「…私は、…そんな言葉では揺らがらないぞ。もう、…な」

「…どういう意味だ」

ユニシアはそつと自分の杖を取り出す。何かあれば自分も隠れているだけでは済まないかもしれない、そう思いながら微かに震える指先を見つめた。

そんな中、思考をまとめようと唇をきゅつと結ぶ。スネイプの言葉は明らかな脅しだ。しかし本当に彼が災厄と呼ばれる箱を開けようとしているのだろうか。クイレルに命じている？ユニシア自身が入学してからもそう考えていたのだろうか、考えれば考える程に理解が追いつかない。瞼をぎゅつと閉じて彼女は考える事だけに集中した。

すると暗闇の中でニイナの言葉がふいに反芻される。間違えていれば無意味だと。その言葉は冷たいが事実だ。試験でもそう、いくら勉強をしても試験当日にその成果を出せなければ無意味だ。次に繋がる、そんな慰めでは済ませたくなかった。そんないつかも分からない次のために努力をしてきたわけではないのだから。そんな感情を静かに渦巻かせ、彼女はゆつくりと瞼を開けた。

「君だつて分かるだろう？見返してやりたい、そんな気持ちを…」

「……くだらんな」

スネイプはクイレルの言葉を一蹴し、首を掴んでそのまま壁へと勢い良く押し付けた。クイレルは噎せながらもうつすらと笑みを浮かべていた。

やがて会話がユニシアの耳に聞こえなくなつたと思うと、クローゼットの扉がゆつくりと開かれた。ユニシアは光に目を細めながら目の前にいるクイレルを見つめた。

「…怖い思いをさせてしまったかな。もう彼ははいないよ、出ておいで」

「クイレル先生…」

「おや、杖まで出していたのか」

握りしめられた杖を見てクイレルが小さく笑う。ユニシアはクローゼットから出ると杖をしまい、微かに赤くなつた首元を見て口を開いた。

「スネイプ先生に、脅されているんですか…?」

「うん? ……どう思う?」

「私は…、…先生は、そんなに悪い人じゃないと…思います」

「スネイプが?」

「いえ、二人とも」

からかう様に言つたクイレルの表情がユニシアのはつきりと放たれた言葉で口元がひくついたので分かつた。

ユニシアは自信なさげな表情はそのまま、しかし言葉ははつきりとしていた。

「悪い人じゃないんですよね?」

「……誰が」

「二人とも」

呆れた、とクイレルが小さく言った。しかしその表情は穏やかなものだ。

「このままでも、良いのかもしれないな」

「このまま？今度は何の話ですか？」

「…未来の話だよ」

クイレルはそう言つて今度は優しくユニシアの手を取り手のひらを向けさせた。何をされるのかと何度も瞬きを繰り返してはいるものの振り払う事はしなかった。やがて手のひらに唇が落とされ、呆けた表情でクイレルを見つめる。

「…時間だ、自分の場所へ…お、お帰り」

ユニシアはほんのりと上気する頬を感じながら部屋を出た。

柔らかな感触が思考を阻む。疑いと親しみ、その両方が頭の中をずるずると這いずつていく。

言葉に出来ない思いに眉を寄せ、ユニシアは部屋へと戻つて行つた。

「…おかえり、ユニシア。あんた授業なかつたはずよね？散歩でもしてきたの？」

部屋に戻ると先にいたニイナが二段ベットの上から顔を覗かせてきた。

「ニイナ、…相談しても、良い？」

「何よ、改まつて。また何かやられたの？良いわよ、誰？やり返してあげる」

「そうじゃないの」

ユニシアは二段ベッドの一段目に腰かけ、ニイナを見上げた。

「災厄の箱の話」

「…嫌よ、そういう架空…、空想の話って好きじゃないの」

「私も空想だつて思つてた。でも、違うの。本当に箱はあつて、しかも…多分 Hogwarts にある」

「やっぱり。誰かに変な事吹き込まれたのね、まあ誰かつて決まっているけど」

「え？…誰？」

「どうせあの新入生たちでしょ、良い？いちいちあんな妄想の冒険ごっこなんか耳を傾けなくて良いの」

そう吐き捨てると、何か言いたげなユニシアに眉を寄せて仕方ないと言わんばかりにニイナは下へ降りて彼女の隣に座った。

「あの一年生の女の子に言われたわよ。ドレナード先輩はいますか？あの箱の本の事を教えて下さい」ってね」

「グレンジャーが言ったの？」

「名前までは聞いていないわよ。でもあのネクタイの色はグリフィンドールね」

「…何の話だろう、私ちよつと…」

「また変な事に巻き込まれるわよ。人の言葉を信じすぎる、どうせ貧乏くじを引かされるのよ!」

立ちあがろうとしたユニシアにニイナは鋭い口調で言う。ユニシアは眉根を下げただだ見つめ返す事しか出来なかった。

「あの子、スネイプが悪い奴だとか言っていたけど、仮にもあの人教師よ?…あんたも、そう思ってるの?」

ニイナの中の常識という壁はなかなか厚い。新たに入ってきた新入生たちとは違うのだ。ある程度、その壁は既に固まっている。それはユニシアも同じだった。

「それは、私も違っていて思ってる」

「じゃあどうして行くの?」

「……クイレル先生が……」

「え?あの人は何よ。あの人に何か言われたの?」

「違う!あ、いや……ええと」

歯切れの悪いユニシアに、ニイナは心配そうにして首を横に振った。

「何でも良いわ。でも、あんたが傷ついて帰って来るの嫌なのよ」

「ニイナ……」

「私も行く。それで良いでしょう?あの子が変な事言ったら私が言い返してやる。あん

たじやまるめ込まれそうだしね」

そう言つて笑うと、ユニシアの瞳がじんわりと涙に覆われやがて雫が落ちる。ユニシアは慌てて目を擦るが、ニイナは「また泣き虫なの？」と言つて楽しそうに笑つていた。